Bulletin of the School of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1993, Vol. 40, 215 − 226.

青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連

佐　藤　朗　子[1)]

問題と目的

ある対象に対して向ける愛着（attachment）の質は，愛着対象への近接可能性（必要な時に近接し得る対象であるか）と愛着対象の応答性（その近接に対して応答を返してくれる存在であるか）によって異なる様相を示すようになる（Bowlby, 1969, 1973, 1980)。Ainsworthら（Ainsworth, Blehar, Waters & Wall, 1978；他）は，幼児の，主たる養育者に対しての愛着の質を3つの類型に大別した。それらは一般に，secure-type, anxious／ambivalent-type, avoidant-typeと呼ばれる。secure-typeの愛着では，対象との関係から安心感を得ることができ，その関係を安全基地（secure-base）として，対象から自由に離れて行動することができる。これに対し，対象との関係から安心感を得ることができないような愛着が，anxious／ambivalent-typeとavoidant-typeに分けられる。anxious／ambivalent-typeは，対象との親密さを望むものの，たえず分離の不安を抱き続けるような愛着である。この場合には，愛着対象に対し過度に近接や親和の要求を向けることになり，対象から離れて外界と積極的に関わることができない。またavoidant-typeは，他者や外界に対する関心を防衛的に排除し，愛着対象を，あるいは親密な愛着関係を避けるという性質を持つ。

愛着の個人差は，愛着対象と自己に関する心的表象（内的作業モデル）の個人差として論じられている。この作業モデルについては，Main, Kaplan & Cassidy (1985) が「愛着に関係する情報の構成や，それらの検索，あるいはその検索の制限などにあたっての，意識的・無意識的な規則のセット」と定義している。人はこのような作業モデルに基づいて，対象に愛着感情を持ち，愛着行動をとる。Bowlbyによれば，この作業モデルは安定性が比較的強く，初期に形成された構造に大きな変化は起こりにくいとされる。すなわち初期の対象（両親，特に母親）への愛着の仕方が，その後の他の対象への愛着の仕方や一般的な対人関係の持ち方を規定し，ひいては社会的発達，適応などを規定すると考えられている。

愛着理論から言えば，人は，まず初めに養育者（母親）に対して愛着を向け，養育者への愛着の仕方と類似した仕方で，養育者以外の対象（父親，きょうだい，友人など）に愛着を向けるようになる。このことは乳幼児を対象とした多くの研究によって，ある程度検証されている。しかし，Lewis (1982) のように，子どもは，初めから，様々な対象に対してそれぞれ独立した関係を結んでいくとする理論もある。ただし乳幼児の場合，養育者すなわち母親への愛着の仕方が，対人関係の持ち方や社会的発達にとっては最も重要な意味を持っている。

愛着理論は，初めは乳児が母に対して向ける愛着を理解するための枠組みであった。しかし1980年頃から，この枠組みを乳幼児期以降の年代の人にも適用する動きが生まれた。そして，親をはじめ重要な他者に対する愛着は，乳幼児や児童のみならず，青年や成人の適応をも支えていることが示されるようになった（Hoffman, Ushpiz & Levy-Shiff, 1988；Kenny, 1987；Salzman, 1989；他)。このような研究においても，乳幼児の場合と同様に，親に対する愛着の仕方と親以外の対象への愛着の仕方には，ある程度の類似性が見られることが報告されている。しかし，様々な対象と様々な関係を結んでいる青年や成人の場合，親以外にも重要な愛着対象を持っており，親との関係の持つ意味は相対的には小さくなる。従って親への愛着と親以外の重要な他者への愛着は，互いに，より独立したものとなりうるし，一般的な対人関係の持ち方や適応状態に対しても各々が独立した結びつきを持ちうるようになる。

愛着理論を青年に適用する研究の主な関心の一つは，初期の対象すなわち親への愛着は，愛着理論で言われるように青年の対人関係の持ち方や適応に対して主だった影響力を持つのか，そしてそれに対して親以外の対象への愛着の影響力はどの程度なのか，ということである。この問題は，換言すれば，主に親への愛着によって青年

1) 名古屋大学大学院博士課程（後期課程）

の適応が規定されるのか，それとも，親への愛着が良好でなくても，親以外の対象に対して良好な愛着を持つことによってそれを補うことができるのか，という問題となる。青年期には，幼児期や児童期に比べて，友人や恋愛対象などが愛着対象としても非常に重要な意味を持つようになる。その中で親への愛着は，それらの親以外の対象への愛着と比較して依然強い影響力を持ったままなのだろうか，という問いである。

以下に述べるいくつかの研究は，親への現在または過去の愛着が，青年の人格特性や精神的健康とどの程度関連しているのか，そしてそれに比して，親以外の重要な他者への愛着はどの程度の関連を示すのか，ということを検討したものである。その中には，Armsden & Greenberg（1987）のように，親への愛着が良好であるほど精神的健康も良好である傾向が強いことを示す研究もある。しかし一方でSoble（1987）は，親への愛着歴がアイデンティティの確立やself-esteemに対して重要な意味を持つのと同様に，親以外の他者への愛着もやはり，それらに対して重要な意味を持つことを報告している。また，Nada Raja, Mcgee & Stanton（1992）は，親への愛着と友人への愛着の良好さによって青年を4群に分け，精神的健康が4群でどのように異なるかを調べることで，親への愛着が良好でなくても，それを，親以外の対象に対して良好な愛着を持つことによって補うことができるのかという問題について直接検討している。もし補うことができるのなら，親への愛着があまり良好でなく，親以外の対象への愛着は良好であるという人は，そのどちらもが良好である人には及ばないまでも，親への愛着だけが良好である人と同等なまでの適応状態にあるはずであった。しかしその結果は，青年の精神的健康に主に関連するのは親への愛着の良好さであり，友人への愛着の良好さによる影響は弱いことを示すものであった。

上記のいくつかの研究では，親や親以外の対象への愛着と関連させる変数として，適応状態に関する変数が取り上げられている。しかし愛着理論によれば，親への愛着から直接影響を受けるのは，一般的な対人関係の持ち方，それも主にintimacyに関わる部分とされている。従って，愛着の仕方と適応状態との関連を調べるだけでは不十分であり，一般的な対人関係の持ち方との関連について検討が必要である。一般的な対人関係の持ち方は，他者一般に対する対人的構えとして考えることができる。すなわち，個人が不特定多数の他者に対して抱いている基本的な態度・志向性として考えることができる。このような対人的な構えは，先に述べた，愛着に関する内的作業モデルによって影響を受けるとされている。そして内的作業モデルは，乳幼児の場合には主に親への愛着の質によって形成されると考えられているが，しかし青年期以降の人の場合，親への愛着のみでなく他の重要な対象への愛着も内的作業モデルに影響していると考えられるのである。

また，親への愛着を親以外の対象への愛着で補うことができるかどうかを検討した，Nada Rajaらの調査は，他のいくつかの理由からも再検討を加える余地があると思われる。まず一つは，調査対象者が15歳という比較的低年齢の青年であったことである。その段階ではまだ親への愛着による影響が強くても，年齢が上がり，親以外の対象との関係がさらに重要さを増すようになれば，それが変わってくるかもしれない。実際，親への愛着と他の変数との関連が加齢に伴って変容することが，O'Donnel（1976）によって示唆されている。彼は，親に対するポジティブな感情とネガティブな感情とを測定し，友人に関してもそれらを測定した上で，親への感情と友人への感情がそれぞれ，self-esteemとどの程度の関連を示すかについて検討した。その結果，低年齢のグループ（8年生）では親への感情のほうがself-esteemと強い関連を示した。しかし年齢が上がると（11年生），親への感情とself-esteemとの関連は弱くなりはしないものの，友人への感情とself-esteemとの関連がそれと同等までに強くなることが示された。O'Donnelは，より年長の青年を対象にすれば，友人への感情のほうが強い関連をもつようになるのではないかと予想している。そこで本研究では，この問題について，横断的データによって年齢的な変容についても検討を加えることとした。

また別の問題点として，親や親以外の対象への愛着の測定に関する点が挙げられる。彼らの調査では，青年期の愛着に関する研究で比較的よく用いられるArmsden & Greenberg（1987）の尺度が使用されているが，この尺度には検討すべき点が残されていると思われる。まず親以外の対象への愛着に関する尺度については，親以外の対象として複数の「仲の良い友人」との関係を扱っている。しかし愛着とは本来，個人が，ある特定の対象に対して向けるものであり，複数の対象への愛着を同一のものと考えるのは適切ではない。また，親以外の愛着対象として友人があらかじめ設定されていることも問題である。確かに青年期には友人関係が親密になり，個人にとって重要な関係となるが，しかし親以外の愛着対象は，友人だけでなく恋愛の対象，きょうだいなど様々なはずである。

さらに，異なる年齢集団を比較しようとすると，Armsden & Greenberg（1987）の親への愛着を測定する尺度にも，不都合な点がでてくる。彼らの尺度は，

愛着の認知的・情緒的側面と行動的側面を下位概念とするものだが，行動的なレベルの項目は，設定状況が比較的限定されているため，生活形態の異なる人たち（例えば，親元を離れている場合と親と同居している場合など）を直接比較するには適切でない面がでてくる。

以上のような点を踏まえた上で，本研究ではまず，青年の親に対する愛着と親以外の対象に対する愛着を測定する尺度を構成することにした。親への愛着については，2つの理由から，年少時を回想する形で測定することとした。その理由の1つは，個人の適応や対人関係の持ち方にとっては，初期の親子関係がより重要であるという愛着理論の指摘からである。ただし，初期の親子関係がより重要であるとは言っても，愛着に関する作業モデルは，単に初期の経験の正確なコピーであるとは仮定されない。むしろ，それらはアクティブな構造であり，後の経験の中で常に再構成されるものであるという新しい概念（Main et al., 1985）が近年支持されている。もし，幼いころの親子関係を正確・客観的に知りたいのなら，青年の回想に頼るという方法には問題が多いであろう。しかし，青年の行動に影響を与えているのが，過去から現在に至るまでの愛着歴について今現在青年が抱いている表象であるなら，過去の回想は指標として重要な意味を持つことになる。それは，ある時点で回想する過去の経験や情緒的体験は，これまでの経験によって再構成され意味づけされたものであろうからである。さらにもう1つの理由は，過去のある時点を回想させるという形式は，生活形態の異なる人たちを比較するのに適しているだろうということである。

一般に，愛着の質を記述する際には，「愛着の対象との関係に対する安心感」と，「その対象への近接行動」が重要な要因としてあげられる（Armsden & Greenberg, 1987)。また Ainsworth (1989) は，secure な愛着関係の規準のひとつとして，その関係を安全基地として対象から自由に離れ，積極的に外界と関わることができることをあげている。これらに基づき，①安心感，②近接行動，③分離不安を，親と親以外の対象への愛着の下位概念としてとりあげることとした。ただし本研究は，青年期の人を対象とするものであるから，近接行動については，行動としての外的な現われだけでなく，その対象への近接やその対象との関係を求めるような心的傾向をも含めた。そしてこれら3つの要因が，親および親以外の対象への愛着を測定する各尺度に共通して含まれるように，Armsden & Greenberg (1987) を参考に項目を収集・作成した。

さらに，本研究では，親や親以外の対象への愛着と関連づける変数として，不特定の他者に対する対人的構えを選んだ。それは，先にも述べたように，愛着理論によれば，親への愛着から直接影響を受けるのは，基本的な対人態度であるとされているからである。本研究では，対人的構えを，特に intimacy の記述の仕方の中から，①他者を求め，他者に接近しようとする傾向，②他者から離れようとする傾向，③他者に接近したいと思いながらもそうすることができない ambivalent な傾向，の3つの下位概念から成るものと捉え，詫摩ら（1988）のほか，山本（1989），Levine, Green & Millon (1986)，Christenson & Wilson (1985)，落合（1983），宮下・小林（1981）などを参考に項目を収集・作成して新たな尺度を構成した。

本研究の目的は，親への愛着の回想と親以外の対象への現在の愛着が，青年の対人的構えとどのように関連するかについて検討し，さらにその関連の年齢差と性差についても検討することである。年齢差を検討するのは，先に述べたように，親への愛着の影響力には年齢的変容が見られる可能性があるという指摘からである。また性差について検討するのは，以下のような理由による。Nada Raja et al. (1992) の研究では，親と親以外の対象への愛着の良好さについて対象を分類する際に，男女をこみにして行っている。しかし彼らの研究では，男子よりも女子のほうが愛着が良好であることが報告されている。もし愛着の仕方が男女で異なるとすれば，性の効果を統制した形で対象者を分類することが必要であるし，その上で，親や親以外の対象への愛着と青年の対人的構えとの関連の性差についても検討することが必要になると思われるからである。

方　法

1　調査対象

大学生と高校1，2年生と中学校3年生を対象に調査を行った。大学生403名（男子181名，女子222名，平均年齢19.8歳），高校生234名（男子105名，女子129名，平均年齢16.4歳），中学生106名（男子54名，女子52名，平均年齢14.4歳）を分析の対象とした。調査時期は，大学生と中学生は1990年8月，高校生は1993年2月である。また調査地域は，大学生と中学生は新潟市，高校生は名古屋市である。

2　質問紙

以下に示す4つの部分からなる質問紙を構成した。なお中学生を対象としたものは，一部字句をわかりやすく書き改めた。

(1)　対人的な構えに関する尺度

他者一般に対する対人的構えを測定する25項目からな

表1　親への愛着尺度　因子分析結果

項　目　内　容	因子1	因子2	因子3
13. 親からあまり好かれていないように感じることがあった。	.67＊	.17	.01
11. 親のことが好きだった。	−.62＊	−.25	.25
5. 今の親とは違う親が欲しいと思うことがあった。	.59＊	.15	−.02
16. 親は，私の本当の気持ちをわかっていなかった。	.58＊	.32	−.06
10. 親は，私のちょっとしたことで，よく気分を害した。	.56＊	.11	.04
20. 親のことを，嫌いだと思うことがあった。	.56＊	.09	−.09
18. 親に捨てられてしまうかもしれないと思うことがあった。	.47＊	.08	.11
8. 親は私の良い面も悪い面もわかってくれていた。	−.42＊	−.32	.09
17. 心配事や悩みがあるとき，それを親に話した。	−.19	−.74＊	.19
9. 親に何か相談したり，親の意見を聞いたりすることは少なかった。	.29	.71＊	−.11
6. 親に悩みを話すのは，はずかしく感じた。	.12	.62＊	.09
1. 学校でのできごとをよく親に話した。	−.22	−.53＊	.20
14. 何か困ったことがあっても，親に頼ることはできなかった。	.43(＊)	.51＊	−.13
4. 親にはげましてもらうと元気がでた。	−.27	−.45＊	.33
7. 親がそばについていてくれないと不安だった。	−.07	−.14	.71＊
12. 親から離れてひとりで行動するのはこわかった。	−.05	−.10	.70＊
15. できれば，親とだけ，いつもいっしょにいたいと思った。	−.05	−.14	.54＊
19. 親や家族以外の人とは，一緒にいても落ち着かなかった。	.17	.10	.41＊
2. 何についても親の意見を聞き，言うとおりにしていた。	−.13	−.32	.38
3. 親によくうそをついた。	.32	.20	−.03
因　子　寄　与	2.92	2.61	2.25

n＝742　＊ 因子負荷量 .40以上

表2　親以外の対象への愛着尺度　因子分析結果

項　目　内　容	因子1	因子2	因子3
8. その人には，私以外の誰とも，あまり親しくしてほしくない。	.71＊	−.00	−.05
15. その人には，私の知らない世界を持ってほしくないと思う。	.65＊	.11	−.12
18. その人が私から離れていくのがこわくて，本当の気持ちを言いにくい時がある。	.59＊	.09	.32
2. できれば，その人とだけ，いつも一緒にいたいと思う。	.58＊	.23	−.16
10. その人がいなければ，私は何もできないと思う。	.55＊	.11	−.16
14. 私はその人のことで，よく不安になったり，いらだったりする。	.55＊	.14	.27
3. その人に対して必要以上に気をつかってしまうことがある。	.47＊	−.02	.31
1. 心配事や悩みがあるとき，その人に話したいと思う。	.11	.67＊	−.21
4. その人にはげましてもらうと元気がでる。	.19	.65＊	−.05
12. その人に素直な気持ちを話すことができる。	−.05	.61＊	−.29
16. つらいときや悲しいとき，その人を思い出す。	.38	.54＊	−.09
7. その人は，私の良い面も悪い面もわかってくれている。	.02	.48＊	−.36
6. 私はその人に，本当には心を許していない部分がある。	.02	−.27	.62＊
20. その人には，本当の私は，理解できないと思う。	−.02	−.50(＊)	.54＊
17. たとえその人でも，あまり私の心の中に踏み込んできてほしくない。	−.10	−.28	.53＊
11. たとえその人とでも，一緒にいると，無性にひとりになりたくなることがある。	−.06	−.05	.50＊
13. その人とは，今は親しくしているが，いずれ，それほどでもなくなってしまうような気がする。	.23	−.32	.43＊
5. その人以外の人とは，一緒にいても楽しくない。	.39	−.10	−.04
9. その人に自分の悩みを話すのは，はずかしく感ずる。	.16	−.38	.37
19. その人との関係が疎遠になっても，それはそれでかまわない。	−.21	−.29	.35
因　子　寄　与	3.15	2.74	1.92

n＝742　＊ 因子負荷量 .40以上

る（表3）。「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法で評定させた。以下，対人的構え尺度とする。

(2)　愛着対象の選択に関する項目

「一緒にいると安心できる人」を，最もあてはまるものから順に，「母親」，「父親」，「親しい友人」，「恋愛の対象」など計11のカテゴリーから3名選択させた。親以外の対象がどのような人であるかの情報を得るための項目である。

(3)　回想された親への愛着に関する尺度

20項目からなる（表1）。「小学生だった頃」について，(1)と同様の5件法により評定させた。以下，親への愛着尺度とする。両親のうちのどちらについて回答するかについては，より重要な対象であるほうが選択されるであろうと仮定し，特に指示をせず，質問があった場合のみ，答えやすいほうについて答えるよう個別に指示した[2)]。

(4)　親以外の対象に対する現在の愛着に関する尺度

20項目からなる（表2）。「親以外の人の中で一緒にいると最も安心できる人」との現在の関係について，(1)，(3)と同様の5件法により評定させた。以下，親以外の対象への愛着尺度とする。

3　手続き

調査は，大学生には講義室で，高校生，中学生には担任の教示のもとに教室で，無記名方式により一斉に行った。

結　　果

1　各尺度の因子構造

尺度の因子構造を確認するために，対人的構え尺度，親への愛着尺度，親以外の対象への愛着尺度のそれぞれについて，主因子分析を行い，バリマックス回転を行った。その結果，各尺度からそれぞれ3因子づつを抽出した。項目の選択は，因子負荷の絶対値が.40以上であることを基準に行ったが，複数の因子にその規準以上の負荷を持つ項目については，それぞれの因子に高い負荷を持つ他のすべての項目の合計得点と当該の項目の得点との相関係数をもとめ，その値の大きいほうの項目群に含めた。各因子に規準以上の負荷を持つ項目の得点の合計をもって，各下位尺度得点とした。

(1)　親への愛着尺度

親への愛着尺度の因子構造を表1に示す。第一因子に高い負荷を持つ項目は，親との関係に対する不信感や親を拒否する気持ちを表すものと思われる。よってこの因子を「不信・拒否」と解釈する。尺度得点のα係数は.81であった。第二因子には，親をsecure-baseとして，安心して頼る傾向を表す項目が高い負荷を示した。この因子を「安心・依存」と解釈する。尺度得点のα係数は.81であった。第三因子には，親から離れることに対する不安を表す項目が高い負荷を示した。そこでこの因子を「分離不安」と解釈する。尺度得点のα係数は.70であった。各下位尺度の内部相関は，「不信・拒否」と「安心・依存」が$r = -.53$，「安心・依存」と「分離不安」が$r = .23$，「分離不安」と「不信・拒否」が$r = -.08$であった。因子構造を見ると，類型的に愛着の質を記述する際の特徴にほぼ類似した内容の項目が，それぞれ同じ因子に高い負荷を持っていることが分かる。青年が回想する親への愛着は，愛着理論での各類型の特徴にほぼ対応する3つの特性傾向によって構成されると考えられる。

(2)　親以外の対象への愛着尺度

親以外の対象への愛着尺度の因子構造を表2に示す。第一因子には，対象との分離の不安を表す項目や個別性がないことを表す項目と，対象への近接可能性や対象との関係に対する不安感を表す項目が，ともに高い負荷を示した。愛着の質の類型的特徴に照らすと，これら2つの傾向は，ともに不安定な愛着と呼ばれるタイプの特徴である。従ってこの因子は「不安」と解釈することができる。尺度得点のα係数は.80であった。次いで第二因子を見ると，対象をsecure-baseとして安心して頼るという傾向を表す項目が高い負荷を示していた。この因子は，親への愛着尺度の第二因子にほぼ対応するものと考えられ，「安心・依存」と解釈できる。尺度得点のα係数は.76であった。さらに第三因子には，愛着対象との親密な関わりを拒否する傾向を表す項目が高い負荷を示した。よってこの因子を「拒否」と解釈する。尺度得点のα係数は.72であった。尺度の内部相関は，「不安」と「安心・依存」が$r = .26$，「安心・依存」と「拒否」が$r = -.58$，「拒否」と「不安」が$r = .04$であった。親以外の対象への愛着尺度でも，愛着類型の3つの特徴をそれぞれ示すような下位尺度が構成された。青年が認知する親以外の対象への愛着も，愛着理論での各類型の特徴に対応する3つの特性傾向によって構成されると考えられる。

2）高校生の男女234名（本調査の対象者）に対し，親への愛着尺度の後に，両親のうちのどちらを思い浮かべて答えたかを項目によって尋ねたところ，約55%の人が母親，42%の人が両親とも，3%の人が父親と回答した。誰を思い浮かべて回答したかによって，親への愛着尺度の，後述するいずれの下位尺度にも得点の有意差はなかった。

表3　対人的構え尺度　因子分析結果

項　目　内　容	因子1	因子2	因子3
8. 他人の役に立ち，喜んでもらうことは，私の何よりの喜びである。	.62＊	.05	−.08
15. 親身になって人の面倒をみることに，生きがいを感ずる。	.56＊	.01	−.12
16. 私が働きかければ，まわりの人は親切に応じてくれると思う。	.52＊	−.28	−.04
19. 親しい人間関係は，私に多くをもたらしてくれると思う。	.46＊	−.19	−.04
10. 非常に親しい人といっしょにいると，まるでその人と一心同体になったように感じる。	.46＊	.02	−.16
24. つきあっていくうちには，まわりの人は私を理解してくれると思う。	.44＊	−.22	−.12
11. 生涯を通してつきあっていきたいと思うような人は，ほとんど現われないだろう。	−.43＊	.28	.17
13. どんなことがあっても友達は私を見捨てたりしないと思う。	.43＊	−.13	−.13
9. 私は，どうしたら人とうまくつきあえるのか，よくわからない。	−.03	.73＊	.07
18. 私は，人に好かれにくい性質だと思う。	−.30	.61＊	.12
21. 本当に私を好きになってくれる人は，あまりいないように思う。	−.32	.54＊	.12
6. 新しく人と知り合うような時には，うまくやっていけるかどうか不安を感じる。	.11	.53＊	−.06
5. たいていの人は，私を好いてくれると思う。	.37	−.50＊	−.04
1. 私はわりあいにたやすく人と親しくなるほうだと思う。	.22	−.45＊	−.07
2. 私はあまり自分に自信を持てない。	.02	.43＊	−.05
25. どんなに親しくなっても，その人はその人だし，私は私であると思う。	−.08	.10	.60＊
12. 人は人，自分は自分であると思う。	−.12	.10	.59＊
23. 私はひとりでいるのが好きなので，他の人達にわずらわされたくない。	−.21	.23	.52＊
20. 自分ひとりだけでいると，なにか物足りない気がする。	.17	.02	−.46＊
3. 私が好きになる人は，考え方や感じ方が私とそっくりな人達である。	.21	.01	−.07
4. 私は，人と深いつきあいをするのは苦手である。	−.27	.38	.28
7. 私は自分以外に頼りになるものはいない。	−.30	.15	.37
14. 私は，自分ひとりだけでいるときも，他の人達と一緒にいるときも，同じように楽しめる。	.25	.14	.32
17. 私は，とても親しい人ができると，自分自身についてあまり考えたりしなくなる。	.04	.10	−.14
22. 心から尊敬できる人を見ていると，自分も誇らしい気持ちになる。	.36	−.07	−.02
因　子　寄　与	2.85	2.66	1.68

n＝741　＊ 因子負荷量 .40以上

(3) 対人的構え尺度

対人的構え尺度の因子構造を表3に示す。第一因子に高い負荷を持つ項目群を見ると，他者に接近する傾向を表す項目が高い負荷を示している。また人間関係に対する信頼感を表す項目群が，それに対する不安感を表す項目群とは分かれてこの因子に高い負荷を示した。すなわちこれらの項目群は，親和性や他者への共感・融合，そして人間関係に対する信頼感を表す項目の集合と言える。従ってこの因子を「親和性」と解釈する。尺度得点のα係数は .74であった。第二因子には，対人的自己や人間関係に対する不安感を表す項目が高い負荷を示した。このことからこの因子を「対人不安」と解釈する。尺度得点のα係数は .76であった。さらに第三因子では，他者から離れ，孤立する傾向を表す項目が高い負荷を示した。そこでこの因子を「孤立性」と解釈する。尺度得点のα係数は .63であった。尺度の内部相関は，「親和性」と「対人不安」が r ＝ −.35，「対人不安」と「孤立性」が r ＝ .21，「孤立性」と「親和性」が r ＝ −.35であった。

2　愛着対象の選択

親以外の人の中で一番初めに挙げられた人を，親以外の愛着対象と考える。大学生では，男女ともに半数以上の人が「親しい友人」を選択し，次いで多くの人が「恋愛の対象」を選択した。高校生では男女とも約60%，中学生では，女子で約81%，男子で約65%の人が「親しい友人」を選択した。

3　年齢・性による下位尺度得点の差異

年齢・性によって，親や親以外の対象への愛着，対人的構えにどのような差異があるかを検討するため，3つ

表4　各下位尺度の平均値と標準偏差

	親への愛着			親以外の対象への愛着			対人的構え		
	不信拒否	安心依存	分離不安	拒否	安心依存	不安	親和性	対人不安	孤立性
中学生男子	21.13(6.25)	16.72(5.45)	8.15(2.82)	14.50(3.93)	14.89(4.50)	16.74(5.44)	24.30(5.27)	22.11(4.40)	11.67(3.35)
女子	19.42(5.84)	19.69(5.19)	9.58(3.49)	14.00(3.28)	18.67(3.17)	17.85(5.83)	28.37(4.84)	21.87(4.35)	11.13(3.48)
高校生男子	22.54(6.26)	18.03(5.04)	8.72(3.11)	15.52(4.68)	17.08(4.45)	18.66(5.99)	26.25(5.69)	21.60(5.75)	12.54(3.74)
女子	20.59(6.79)	20.60(5.61)	9.34(3.56)	13.64(4.46)	19.43(3.60)	18.99(6.58)	27.71(4.31)	21.91(4.69)	12.57(3.18)
大学生男子	19.41(5.55)	18.86(4.88)	8.97(2.82)	15.13(3.90)	17.36(3.59)	18.29(5.81)	27.01(4.67)	21.31(4.83)	12.50(3.19)
女子	17.95(6.33)	21.08(5.49)	9.22(3.42)	13.59(3.89)	20.19(3.09)	17.86(5.25)	29.09(3.96)	20.64(4.41)	12.34(2.92)
年齢	16.08＊＊	4.83＊＊	0.20	0.28	12.87＊＊	2.89	7.87＊＊	3.30＊	5.12＊＊
性	13.09＊＊	39.35＊＊	5.09＊	24.53＊＊	110.69＊＊	0.01	40.54＊＊	0.77	0.43
年齢×性	0.11	0.24	1.41	1.04	1.42	0.85	2.92	0.78	0.27

自由度は5と735，または5と736.　＊＊ $p<.01$　＊ $p<.05$

の尺度の各下位尺度得点について，3（年齢）×2（性）の分散分析を行った。各下位集団の各得点の平均値と標準偏差，ならびに分散分析結果を表4に示す。

(1)　年齢による差異

分散分析の結果，年齢と性の交互作用は，どの下位尺度においても見られなかった。そこで，年齢の主効果について見ていく。

まず親への愛着尺度であるが，この尺度は，小学校時代を回想して回答するという形式になっている。しかし，実際の小学校時代の親子関係そのものというよりはむしろ，現在の親への愛着をも含めて，個人の愛着歴に関する表象を測定していると考えられる。分散分析の結果，「不信・拒否」において，年齢の主効果が見られ，Tukey 法による事後検定の結果，中学生・高校生よりも大学生のほうが得点が低かった。また「安心・依存」にも，年齢の主効果が見られ，事後検定の結果，中学生と大学生の間にのみ有意差が示されたが，年齢が上がるほど数値が少しずつ高くなる傾向が読める。「分離不安」には，年齢の主効果は見られなかった。これらの結果を総合すると，年齢が上がるにつれて，親への愛着歴の表象が，よりポジティブな性質を持ってくることが示されている。

次いで，親以外の対象への愛着尺度では，「安心・依存」において年齢の主効果が見られた。事後検定の結果，中学生とその他の間にのみ有意差が見られたが，年齢が上がるほど高い値を示している。この結果は，友人への依存が加齢とともに減少して行くわけではないことを示す Hunter（1982）の結果と一致する。特定の対象を secure-base として必要なときに頼るという行動は，発達的に減少して行くものではない。

対人的構え尺度では，3つの下位尺度すべてに，有意な年齢の主効果が見られた。「親和性」では，中学生・高校生よりも大学生のほうが高い値を示した。また「対人不安」では，事後検定の結果は，どの年齢集団間にも有意差は見られなかった。「孤立性」では，高校生・大学生よりも，中学生のほうが得点が低かった。

(2)　性による差異

性による差異は，親への愛着尺度と親以外の対象への愛着尺度で似た結果を示した。

親への愛着尺度については，3つの下位尺度すべてに，性の主効果が見られ，「不信・拒否」は男子のほうが，「安心・依存」と「分離不安」については女子のほうが得点が高かった。

また親以外の対象への愛着尺度では，「拒否」と「安心・依存」において性の主効果が得られ，前者は男子が，後者は女子が高得点であった。これらの結果は，女子のほうが，父母からのサポートを多く認知するという結果（Ferman & Buhrmester, 1992）や，女子のほうが友人関係において信頼感が高くコミュニケーションが多いという結果（Armsden et al., 1987 ; Nada Raja et al., 1992）と合致するものである。

また，対人的構え尺度では，「親和性」において性の主効果が見られ，女子のほうが得点が高かった。

4　親への愛着と親以外の対象への愛着による対人的構えの差異

ここでは，回想した親への愛着の良好さと，親以外の愛着対象に対する現在の愛着の良好さによって，対人的構えにどのような差異が見られるかを，以下の手続きによって検討した。まず，回想した親への愛着の良好さによって調査対象者を2群に分けるために，親への愛着尺度のうちの，互いに比較的相関の高い「不信・拒否」と

「安心・依存」の2つの下位尺度の合計得点(「不信・拒否」については得点を逆転した)による合成変数を構成した。その後，その合計得点の平均値を境に，調査対象者を愛着の良好な群とあまり良好でない群に二分した。また親以外の対象への愛着尺度についても，「拒否」と「安心・依存」による合成変数を構成し，得点の平均値を境に同様の分類を行った。なお上記の「結果と考察3」に示したように，各下位尺度には年齢や性によって得点差が見られたので，年齢と性ごとにこの操作を行った。次いで，各下位集団ごとに，対人的構えの各下位尺度得点について，親への愛着(2)×親以外の対象への愛着(2)の分散分析を行った。その結果を表5から表10に示す。

対人的構え尺度と親への愛着尺度との相関よりも，対人的構え尺度と親以外の対象への愛着尺度との相関のほうが高い傾向があるため（表11参照。各下位集団において相関のパターンはほぼ同様であったため，全体の結果のみを挙げた)，一般に，親以外の対象への愛着の良好さによって差異が見られることが多かったが，しかし，交互作用傾向もいくつか見られた。各下位集団ごとの得点の分布を見るといずれもほぼ相称形であり，これらの交互作用傾向はいわゆる天井効果や床面効果によるものではないと思われる。

まず中学生男子（表5）では，「親和性」において親への愛着の主効果が見られ，親への愛着が良好なほうが得点が高かった。しかし，人数が少ないことからも有意水準には至らなかったが，ここでは親への愛着と親以外の対象への愛着の交互作用傾向があることがわかる。4群の数値を見ると，親への愛着と親以外の対象への愛着がともにあまり良好でない群（表中のLL群，以下LL群と称する）が，他の3群に比して「親和性」得点が低い傾向にある。そしてこの傾向は，「対人不安」と「孤立性」についても同様である。すなわち，LL群が他の3群に比べ，「対人不安」が高く「孤立性」が高いという傾向が見られた。

次いで中学生女子（表6）では，「親和性」において親以外の対象への愛着の主効果が見られ，良好な群が高得点であった。また，有意水準には満たなかったが，親への愛着によっても同方向の差異傾向が見られた。「対人不安」では，やはり有意ではないが，交互作用傾向のあることが，数値から読める。すなわち，中学生男子の場合と同様に，LL群が他の3群に比して得点が高い傾向にあった。「孤立性」には，親への愛着や親以外の対

表5　中学生男子における対人的構えの群差

親	親以外	n	親和性	対人不安	孤立性
H	H	20	26.10(3.01)	21.75(3.85)	11.30(3.01)
H	L	8	25.13(4.49)	20.63(5.66)	11.25(2.71)
L	H	13	25.46(6.49)	21.69(3.38)	10.69(3.25)
L	L	13	19.85(5.01)	24.00(5.13)	13.46(3.95)
親愛着(A)			3.36	1.07	0.28
親以外愛着(B)			6.43＊	0.31	2.39
A×B			2.90	1.87	2.25

( ) 内は標準偏差　自由度は3と50.　＊＊p＜.01　＊p＜.05
※表中において，Hは愛着が比較的良好である群を，Lはあまり良好でない群を指す。以下表10まで同様

表6　中学生女子における対人的構えの群差

親	親以外	n	親和性	対人不安	孤立性
H	H	17	31.00(4.57)	21.00(5.35)	11.12(4.26)
H	L	12	27.08(2.97)	20.50(2.50)	11.17(2.95)
L	H	10	27.80(4.39)	21.50(3.31)	10.60(3.86)
L	L	13	26.54(5.81)	24.54(4.16)	11.54(2.76)
親愛着(A)			2.10	3.69	0.01
親以外愛着(B)			4.51＊	0.85	0.20
A×B			1.05	2.26	0.19

( ) 内は標準偏差　自由度は3と48.　＊＊p＜.01　＊p＜.05

表7　高校生男子における対人的構えの群差

親	親以外	n	親和性	対人不安	孤立性
H	H	27	30.07(4.21)	18.11(5.26)	9.52(4.19)
H	L	28	22.68(5.75)	25.18(5.70)	14.29(3.13)
L	H	22	28.91(4.32)	20.05(5.13)	12.14(3.07)
L	L	27	23.96(4.57)	22.59(4.34)	14.07(2.13)
親愛着(A)			0.02	0.24	2.98
親以外愛着(B)			44.15＊＊	24.00＊＊	29.44＊＊
A×B			1.69	4.92＊	4.93＊

( ) 内は標準偏差　自由度は3と100または3と99.
＊＊p＜.01　＊p＜.05

表8　高校生女子における対人的構えの群差

親	親以外	n	親和性	対人不安	孤立性
H	H	37	29.92(3.95)	20.00(4.56)	11.84(2.85)
H	L	28	26.14(3.77)	22.93(3.55)	13.36(2.90)
L	H	27	29.26(3.22)	22.70(5.14)	11.15(3.12)
L	L	37	25.57(4.34)	22.46(4.86)	13.73(3.24)
親愛着(A)			0.79	1.82	0.08
親以外愛着(B)			29.06＊＊	2.77	14.34＊＊
A×B			0.00	3.78	0.97

( ) 内は標準偏差　自由度は3と125.　＊＊p＜.01　＊p＜.05

表9　大学生男子における対人的構えの群差

親	親以外	n	親和性	対人不安	孤立性
H	H	59	29.08(4.01)	18.83(4.47)	11.53(2.97)
H	L	40	26.45(3.94)	22.83(4.37)	13.30(2.62)
L	H	33	28.03(3.23)	20.97(5.00)	11.15(2.88)
L	L	49	24.27(5.36)	23.31(4.21)	13.92(3.36)
親愛着(A)			6.26＊	3.60	0.08
親以外愛着(B)			23.49＊＊	22.84＊＊	24.02＊＊
A×B			0.75	1.48	1.19

( ) 内は標準偏差　自由度は3と177.　＊＊p<.01　＊p<.05

表10　大学生女子における対人的構えの群差

親	親以外	n	親和性	対人不安	孤立性
H	H	69	30.58(3.42)	19.14(4.31)	11.71(3.24)
H	L	49	28.06(3.70)	21.71(4.18)	12.59(2.44)
L	H	42	30.41(3.90)	20.33(4.24)	11.87(2.50)
L	L	62	27.30(3.89)	21.72(4.38)	13.18(2.97)
親愛着(A)			0.88	0.96	0.96
親以外愛着(B)			30.23＊＊	12.14＊＊	7.41＊＊
A×B			0.33	1.00	0.30

( ) 内は標準偏差　自由度は3と218.　＊＊p<.01　＊p<.05

表11　各下位尺度間の相関

		親以外の対象への愛着			親への愛着		
		拒否	安心依存	不安	不信拒否	安心依存	分離不安
対人的構え	親和性	−.38＊＊	.55＊＊	.14＊＊	−.24＊＊	.17＊＊	.12＊＊
	対人不安	.30＊＊	−.28＊＊	.14＊＊	.20＊＊	−.11＊＊	−.09＊
	孤立性	.34＊＊	−.23＊＊	−.15＊＊	−.00	.22＊＊	−.03
親への愛着	不信拒否	.22＊＊	−.18＊＊	.12＊＊			
	安心依存	−.20＊＊	.22＊＊	.00			
	分離不安	.14＊＊	−.03	.27＊＊			

n=741〜743.
＊＊p<.01　＊p<.05

象への愛着による差異が見られなかった。

高校生男子（表7）では，「親和性」において親以外の対象への愛着の主効果が見られた。また「対人不安」では，親以外の対象への愛着の主効果とともに，交互作用が有意であった。親への愛着があまり良好でない群では親以外の愛着による差異が小さいのに対して，親への愛着が良好な群においては，親以外の対象への愛着による差異が大きかった。さらに「孤立性」においても有意な交互作用が見られ，親への愛着と親以外の対象への愛着がともに良好な群（表中のHH群，以下HH群と称する）が，他の3群よりも得点が低い傾向にあった。

高校生女子（表8）では，「親和性」と「孤立性」に親以外の対象への愛着の主効果が見られた。ただし，「孤立性」における差異は，かなり小さいものである。また「対人不安」では有意ではないが交互作用傾向が見られ，HH群が他の3群よりも得点がやや低い傾向が見られた。

大学生男子（表9）では，「親和性」に親への愛着の主効果と親以外の対象への愛着の主効果がともに見られた。さらに「対人不安」には親以外の対象への愛着の主効果が見られた。「孤立性」では親以外の対象への愛着の主効果が見られた。

最後に大学生女子（表10）では，「親和性」，「対人不安」，「孤立性」のすべてに，親以外の対象への愛着の主効果が見られた。ただし，「孤立性」での差異はかなり小さかった。

以上の結果を年齢比較してみると，男子でも女子でも，概ね以下のように言えるだろう。まず中学生段階では，親への愛着による対人的構えの差異傾向が見られ，さらに親への愛着と親以外の対象への愛着の交互作用傾向も見られる。その交互作用とは，親への愛着も親以外の対象への愛着もともにあまり適応的でない群が，他の3群に比べて対人的構えが良好でないという型である。それが高校生になると，親以外の対象への愛着の効果が主として見られるようになる。また，交互作用傾向も見られるが，それは中学生とは異なり，親への愛着，親以外の対象への愛着がともに良好である群が，他の3群に比べ対人的構えが良好であるという型になる。また大学生になると，交互作用傾向も見られなくなり，親以外の対象への愛着による差異傾向のみが見られるようになる。

各年齢段階で性による比較を行うと，高校生では，男子のほうに，親への愛着と親以外の対象への愛着の交互作用がより強く見られるようである。また大学生でも，親への愛着による比較的大きな差異が男子のほうに見られる。すなわち，男子のほうが親への愛着からの影響に比較的敏感な傾向があると言えるだろう。

考　察

加齢に伴って，親への愛着による差異が小さくなり，親以外の対象への愛着による差異が大きくなっていくことは，一般的な対人態度に影響を与えるものが，親への愛着から親以外の対象への愛着に移行していくということによると思われる。すなわち，年齢が低いうちは，親への愛着歴の表象によって受ける影響が比較的大きいが，年齢が上がるにつれてそれが少なくなり，代わって親以外の愛着対象の持つ意味が大きくなってくるのだと考えられる。言い換えると，親への愛着歴の表象が与える影響から次第に独立していくということになるだろう。

では中学生から高校生にかけて，交互作用のパターンが，親への愛着も親以外の対象への愛着もともに良好でない群が特徴的である（対人的構えが良好でない）型から，それらがともに良好である群が特徴的である（対人的構えが良好である）型へと変容することについてはどのように考えたらよいであろうか。中学生段階での交互作用の結果は，親あるいは親以外の対象への愛着のうち，少なくともどちらかが良好であれば，比較的適応的な対人態度を持つことができることを示した。そして，どちらもがあまり良好でない群が特徴的な傾向を示していた。それが高校生になると，親と親以外の対象への愛着がともに良好である群が特徴的となった。すなわち，親あるいは親以外の対象への愛着のうち，一方でも良好でないものがあると，両方が良好である場合よりも対人態度が適応的でなくなるということである。このように，親と親以外の対象への愛着の両方が良好であることが重要になってくるということが意味することの一つの可能性として，以下のように考えられる。中学生段階では，親への愛着と親以外の対象への愛着が，一般的対人態度に対してどちらも似たような（すなわち，加算的に考えることが可能な）意味を持っていると考えられる。その結果として，どちらかでも良好であることが重要となり，そのことで対人的構えが良好になることが可能である。それが高校生になると，親への愛着と親以外の対象への愛着は，互いに独自の意味を持つようになり，その結果として，どちらに対する愛着も良好であることがより重要になってくるのではないかということである。このような変容が起きるのは，各愛着対象が個人に対して持つ機能や役割が加齢とともに分化していくことによるのかもしれない。しかし，これは単なる推察に過ぎず，この点について明らかにするには，さらに詳細な検討が必要である。

いずれにしても，本研究の結果は，青年の精神的健康は主として親への愛着からのみ影響を受け，友人への愛着のいかんによって親への愛着が良好でないことが補われることはないとする，Nada Raja et al.（1992）とは異なった結果を示した。対人的構えについて，親への愛着と親以外の対象への愛着との交互作用が見られたことは，これらが互いに関係し合って青年に影響を与えていることを示している。また，親への愛着による差異や，親への愛着と親以外の対象への愛着の交互作用が，加齢に伴って小さくなっていくことは，親への愛着の持つ影響力が，次第に小さくなることを示している。ただし，本研究と Nada Raja et al.（1992）には，関連させた変数において違いがある。Nada Raja et al. では精神的健康が取り上げられたが，本研究では他者一般に対する対人的構えを取り上げた。これら2つの研究結果の違いは，個人内の精神的な状態と，対人的な特徴とでは，親への愛着からの影響の受け方が異なることを示すのかもしれない。その意味では，今後の研究の課題として，どのような人格特徴がどのような影響を受けるのか，ということをも問題にしなければならないだろう。しかし本研究において，親への愛着の影響に年齢による差異傾向が見られたことは重要である。精神的健康についても，より年長の青年を対象としたなら，本研究で示されたような結果が見られたかもしれない。

さて，本研究では，親や親以外の対象への愛着と対人的構えの関連における性差についても検討した。結果を見ると，中学生ではあまり性による差が見られないが，高校生・大学生になると，親への愛着による差異や親への愛着と親以外の対象への愛着の交互作用が男子のほうに強く見られるようになった。これは，親への愛着から受ける影響に，男子のほうが敏感であることを示すものと考えられる。親やその他の対象に対する親密さや依存行動において性差が見られ，男子のほうがそれが少ないことは多くの研究によって示されている。そのことと，男子が親への愛着から受ける影響により敏感であることとは，何らかの関係があると考えられる。例えば，女子のほうが比較的多くの対象に良好な愛着を向けることができ，親以外の多くの愛着対象に対して様々な経験を持つことができるとすると，そのことによって，親への愛着からの影響を相対的に弱くすることが可能になるということも考えられる。親への愛着から受ける影響の性差については，Skolnik（1985）が，幼児期の親への愛着とその後の対人関係の持ち方の関連についての縦断研究において，男子のほうが社会的経験の中からネガティブな影響を受けやすいことを示唆している。けれどもこれまでの研究の流れの中では，主だった論点となってこなかったのが現状である。しかし，多くの研究が示すように，親や親以外の重要な他者に対する関係の持ち方は男

女で異なっているならば，それらが他の人格特性に与える影響にどのような違いがあるかについても検討してみる価値があるだろう。この点についても，今後の検討が必要である。

付　記

本論文は，平成2年度新潟大学に提出した修士論文の一部に新たなデータを加え，再構成したものです。論文作成にあたってご指導くださいました，名古屋大学小嶋秀夫教授に深く感謝いたします。また調査にご協力くださいました方々にお礼申し上げます。

引 用 文 献

Ainsworth, M. D. S. 1989 Attachment beyond infancy. *American Psychologist,* **44**, 709-716.

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 Patterns of attachment : A psychological study of the strange situation. NJ : Lawrence Erlbaum Associates.

Armsden, G. C., & Greenberg, M. T. 1987 The inventory of parent and peer attachment : Indiv idual differences and their relationship to psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence,* **16**, 427-454.

Bowlby, J. 1969 Attachment and loss, vol.1, Attachment. London : The Hogarth Press.（黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子訳 1976 母子関係の理論Ⅰ 愛着行動　岩崎　学術出版社）

Bowlby, J. 1973 Attachment and loss, vol.2, Sep aration : Anxiety and anger. London : The Hogarth Press.（黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 1977 母子関係の理論Ⅱ 分離不安　岩崎学術出版社）

Bowlby, J. 1980 Attachment and loss, vol. 3, Loss : Sadness and depression. London : The Hogarth Press.（黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳 1981 母子関係の理論Ⅲ 愛情喪失 岩崎学術出版社）

Christenson, R.M., & Wilson, W.P. 1985 Assessing pathology in separation-individuation process by an inventory. *The Journal of Nervous and Mental Disease,* **173**, 561-565.

Ferman, W., & Buhrmester, D. 1992 Age and sex differences in perceptions of networks of personal relationships. *Child Development,* **63**, 103-115.

Hoffman, M., Ushpiz, V., and Levy-Shiff, R. 1988 Social support and self-esteem in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence,* **17**, 307-316.

Hunter, F.T., & Youniss, J. 1982 Changes in functions of three relations during adolescence. *Developmental Psychology,* **18**, 806-811.

Kenny, M.E. 1987 The extent and function of parental attachment among first-year college students. Journal of Youth and Adolescence, **16**, 17-29.

Levine, J.B., Green, C.J., & Millon, T. 1986 The separation-individuation test of adolescence. *Journal of Personality Assessment,* **50**, 123-137.

Lewis, M. 1982 The social network system model : Toward a theory of social development. in Field, T.M., Huston, A., Quay, H.C., Troll, L. & Finley, G.E.(eds.) *Review of Human Development.* NY : Wiley.

Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood : A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development,* **50**, 66-104.

宮下一博・小林利宣 1981 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究 **56**, 160-166.

Nada Raja, S., McGee, R., & Stanton, W.R. 1992 Perceived attachments to parents and peers and psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence,* **21**, 471-485.

落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成 教育心理学研究 **31**, 60-64.

O'Donnel, W.J. 1976 Adolescent self-esteem related to feelings toward parents and friends. *Journal of youth and adolescence,* **5**, 179-185.

Salzman,J.P. 1989 Primary attachment at adolescence and female identity : An extension of Bowlby's perspective. *Dissertation Abstracts International,* **49**, 5044-5045.

Skolnic, A. 1985 Early attachmant and personal relationships across the life course. *Life-span*

Development and Behavior, 7, 173-206.
Soble, J.A. 1987 The ralationship between past and current attachment, and current emotional functioning during late adolescence. *Dissertation Abstracts International*, 48, 1820-1821.
詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度：成人版愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学部人文学報, 196, 1-16.
山本里花 1989「自己」の二面性に関する研究―青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討 教育心理学研究 37, 302-311.

(1993年8月30日 受稿)

ABSTRACT

The relation of adolescents' attachment to parental and non-parental objects and general interpersonal orientation

Akiko SATO

The purpose of this study was to examine the degree to which quality of adolescents' attachment to parental and non-parental objects was associated with their general interpersonal orientation. A set of questionnaires concerning attachment to a parent, attachment to a non-parental object, and general interpersonal orientation was administered. The subjects were 106 junior high school, 234 senior high school, and 403 college students. They were classified into four groups by combining their security of attachment to parental and non-parental objects. Junior high school students classified as the insecurely attached both to parental and to non-parental objects were less intimate and more ambivalent in their interpersonal relationships than the other three groups. Senior high school students classified as the securely attached both to parental and to non-parental objects were less ambivalent in their interpersonal relationships than the other groups. The results were interpreted that while junior high school students' positive attachment to non-parental objects mitigates the negative effects of insecure attachment to parents, positive attachment both to parental and non-parental objects are important for senior high school students' positive interpersonal relationships. Attachment to non-parental object, but not to parental object, was related to interpersonal orientation of the college students.